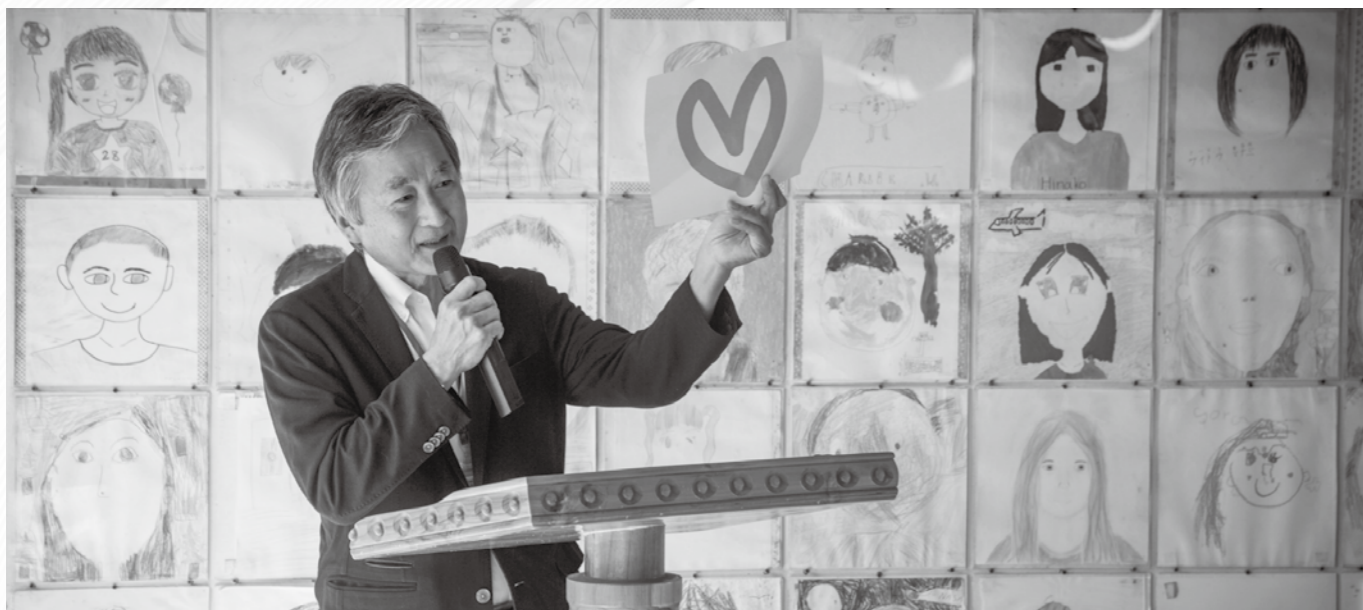


井津 建郎

特定非営利活動法人フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN 創設者 / 理事

アートの中で支援を募り、 カンボジアとラオスに小児病院を開設



井津 建郎

Kenro Izu

特定非営利活動法人
フレンズ・ウィズアウト・
ア・ボーダー JAPAN
創設者 / 理事

1949年、大阪生まれ。日本大学芸術学部を1971年に中退し、渡米。以後フォトグラファーとして活躍。1979年以来、約40年間にわたって『聖地』を撮影する。1993年、アンコール遺跡群の撮影のため初めてカンボジアを訪れる。1994年、カンボジアで、たった2ドルの治療費が払えないことで診療を拒否され、幼い命が消える現場に遭遇。1995年、巡回写真展で集めた資金を基に特定非営利活動法人「フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー」をニューヨークで設立。1999年カンボジア、2015年ラオスに、無償で治療が受けられる小児病院を設立。2014年、子どもの保健分野に10年以上貢献した個人に贈られる「ワールド・オブ・チルドレン・アワード保健賞」を受賞。

推薦者 | 梅本 和義 国際交流基金 理事長

撮る(Take)から、返す(Give)へ

井津建郎氏が、アンコール遺跡群の撮影のため、カンボジアを訪れたのは1993年だった。22年間に亘る内戦が終結してから、まだ2年後のこと。撮影中に集まってくる子ども達の中には、地雷で手や足を失ったまま治療を受けていない子や、皮膚病の子がいた。この国の医療事情を知りたいと、ガイドに依頼して県立病院に向かった。小児病棟には、患者の姿はほとんど見えない。不思議に思っていると、一人だけ10歳位の女の子がいた。“州内唯一の病院なら、娘の命を救ってもらえるのでは”と、遠くの村からトラックの荷台などに乗せてもらい、父が連れてきたのだという。しかし、たった2ドルの治療費が払えないことから診療を拒否され、目の前で息を引き取った。

医療者のモラルと、眼前で幼い命が失われた事態に衝撃を受けた井津氏は、ニューヨークに帰ると仲間と声をかけ、NPO法人を設立。無償で医療を受けられる病院建設に向けて動き出す。資金集めのためにアンコール遺跡群の巡回写真展を行い、アンコール遺跡作品を1000枚販売して100万ドルを調達することを目標にした。1年後に約30万ドルが集まり、さらに、紹介されて出会った二人の日本人が「あなたが集めたお金と同額を寄付しましょう」と申し出てくれ、建設工事への目処が立った。米国の仲間である建築家やデザイナー達は設計やロゴデザイン



アンコール小児病院は2013年、完全に現地化し、カンボジア人スタッフが主体となって運営している。

など自らの才能を提供してくれ、1999年、非営利のアンコール小児病院が開院するに至る。アンコール遺跡群の写真で得た浄財が、カンボジアの子ども達の命を救うために使われたのである。撮る(Take)から、返す(Give)へ。写真家の井津氏だからこそ、できた支援に他ならない。

アートは世界を変えうる

井津氏の理念は、病院運営は現地の人に全て任せるというもの。アンコール小児病院は、25年前に入職した青年医師が50代となり、CEO兼院長として活躍している。看護部長と総務部長も、開設



定期的に外国人スタッフから最先端の治療技術、医療機器の使い方などの講習を受け、知識と技能を磨いている。

設当時から働いている現地のスタッフだ。職員の中には、元患者だった人もいる。地雷を踏んでしまい足が切断寸前だった男の子は、アンコール小児病院関係者の尽力でハワイの病院で接合手術を受け、無事に治癒。“いつか恩返ししたい”という思いを叶え、看護師として多くの人のケアをしている。

2015年には、ラオスにも小児病院を開設した。フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーの理念には、患者に対して“自分の子どものように接する”(Compassionate Care)というものがある。この考えはラオスの病院でも確実に根付きつつある。

幼少期は医師になりたかったという井津氏。高校生の頃は微生物や細胞の美しさに魅せられ、顕微鏡写真を撮っていた。医学に憧れた写真家が病院を興すことで、200万人を超える子ども達に医療を届けることになる。アートに投影された光に人が集まり、病院建設を後押しした。Art Can Make A Difference. アートは世界を変えうる。